

予も島原の城下に一宿して、又ふねに乗り、天草に渡れり。

〔半日閑話三〕一肥前國島原山海大變之一件

當二月大坂紺屋丁日雇頭大和屋市右衛門惣惣治郎と申もの、肥前唐津之城主水野左近將監様御歸城ニ付、右の者御供致じ、彼地へ罷下り、同四月五日島原之御城主松平主殿頭様御參府ニ付、右御道中人足御用承手代壹人人夫四拾人召れ、島原ニ逗留中、危キ命を助る一件

島原當月十八日より度々震動致、普賢山と申山々方六十間程の窪所より湯氣立上り、後には火烟に成、温泉有此處に夫より段々山々燒ひろがり、大石大に燒落、蜂ヶ谷と云所へ焼移り、二月九日頃、彌火強く、三月朔日二日一夜に幾度ともなく地震致し、此時島原の御城櫓二ヶ所崩れ申候、右惣治郎、島原町方に旅宿を取、逗留致候所、四月朔日又々地震致候ニ付、旅宿を逃出んと騒ぎ候へば、例の地震に候間、鎮り居候様にと、宿の者申に任せ、見合居候所間遠に成候、無程亦々地震鳴動致候ニ付、最早こらへかね逃出候處家居諸木とも折倒れ、大地所々貳三尺程づゝ割往來ニ水がさ腰より上越し、山々の火もむらさき色に燃上り、眞の闇にて、東西南北見へ不分、おそろしき事言語に難申、男女泣叫逃出候得共、津浪、山より吹出し泥熱湯と一つに成、如何して可叶や、然るに惣治郎は漸逃延、御城内に不明門と申所迄、凡六尺餘の水を凌、石垣に取付、御曲輪の松明燈挑の火にて御城へ逃出命助り候、此者手代は追手御門外大溝の中へ打込、面部手足ともに打ぬき、半死半生ニ而上り、所々療治に預り候處先命無別條候、右大坂より召れる日雇の者四十人之内、三人助り残り三拾七人は何れへ流行候哉、一向生死相知不申候、三人都合五人、四月十九日大坂へ歸著致し、見及候有様、左之通四月朔日酉ノ刻迄、地震數度南海ノ方より水押上、山々よりは泥吹出し、山燒の火は紫色に相見へ申候、最初燒出、普賢山より城下には貳里餘り有之候、段々山々燒計り、四月朔日頃御城下へ續、二十七丁程之火ニ間相見へ申候、津波半時計の内にて潮引申候、御